

第6回 CS-ET サロン報告

浅石裕司（日本福祉大学）



テーマ：社会福祉学の研究者にできるソーシャルインパクトのやり方を考える

日 時：2025 年 9 月 14 日（日）14：00-17：00（その後、懇親会）

場 所：関西大学梅田キャンパス（Zoom とのハイブリッド開催）

参加者：45 名（対面 15 名、オンライン 30 名）、懇親会 12 名

「久しぶりに、本当に良い研修に参加できた」と感じています。自分事として先生方のお話を聞き、大いに反省し、今後に向けたモチベーションが高まる場となりました。

高良麻子先生の基調講演は、社会福祉学を志した原点を問われているような、圧倒的な内容でした。社会福祉学の専門家・専門職として、ウェルビーイングの実現を目指したソーシャルインパクトを意図的に起こすという、重要な使命を再認識しました。「どのような社会問題に取り組むのか」という調査者としての役割、「成功」を数値だけではなく当事者の置かれた状況を変えられているか捉えるといった評価者としての役割、コンサルとして、教育者として、など、多様な研究者の役割を教えてくださいました。ソーシャルアクションと政策形成という、研究に携わる者のあるべき姿を自覚し、目が覚める思いでした。モチベーションが上がった私は、早速高良先生の代表著書を購入しようと検索しましたが、高騰していて手が出ず……。借りて読みたいと思います。

話題提供者のお二人の話も、示唆に富んでいました。まず、大原裕介先生が理事長を務める、社会福祉法人ゆうゆうが取組む「共愉のまちづくり」は、私の研究テーマとしても存じ上げており、研修の場で一緒にできることに感激しておりました。特に刺激的だったのは、赤字かつ老朽化した特養をどうするかの助言を求められた際、単にアドバイザーとして関わるのは無責任なので、1年間で研究調査し、今後のビジョンに責任をもって取り組んだというお話でした。そうした実践の積み重ねが、町のビジョンづくりになり、北海道全域、国の実践事例へと展開しているのだと分かりました。私自身は、なかなかそこまで覚悟と自信を持てずにいるのが正直なところですが、少なくとも、今携わっている自治体との協働からは逃げずに向き合おうという気持ちを強くしたところです。

「NPO法人の理事長と教員を行ったり来たりしている」という永野咲先生のお話からは、当事者に対する研究者の権威性を自覚するというお話が、一番印象に残っています。外から見ると「こうすれば良いのに」と思うことがあっても、これまで培ってきた活動の経緯があり、これを尊重することがパートナーシップであると同い、自分自身を省みたところです。里親、児童養護や社会的養護で暮らすユースが、当事者の声を出せる意義と、当事者が政策提言の場をつくる土台としての、研究者の役割を教えてくださいました。活動を継続するための人件費確保の難しさのお話からも、今後の実践に向けた課題をリアルに突き付けられた気持ちとなりました。

私も話題提供させていただきました。一緒に先生方のようなインパクトは起こせていませんが、

「自分にできる小さな変化から起こしていこう」というメッセージで、「コミュニティファンドの小さい版」に取り組み始めた実践をお話しました。「これでソーシャルインパクトなのだろうか…」と、話すことにも若干自信がありませんでしたが、先生方の話を伺い、自身の実践と重ねて考えたことで、私が取り組む「手作り小さな実践」も、方向性として間違っていないかと、非常に励まされる思いでした。

夜の部も白熱し、それぞれの実践、研究についての想いなど、先生方や参加された皆様と時間を忘れて語り合うことができました。私は本当に時間を忘れ、慌ててホテルに戻りました…。

当日の参加者からは、憧れの先生の話聞いた、新しい視点を得られた、実践と理論の結びつきを考えられた、自身の励みになった、プロセスを経る大切さを感じた、等の声がありました。素晴らしい場を用意してくださった研究支援委員会の先生方、一緒に語りあった参加者の皆様、大変ありがとうございました。今後のCS-NETサロンにも期待が高まっております。